

差出人: NewsMail - metaFrontier.jp, LLC <newsmail@metafrontier.jp>  
送信日時: 2014年2月17日月曜日 0:06  
宛先: info@metafrontier.jp  
件名: メタフロンティア ニュースメール Vol.23 (2014/2/17)

各位

いつもお世話になっております。  
メタフロンティア合同会社の柴田賀昭です。

弊社が関わる業界団体の活動に関し、ファイルベース関連のトピックやセミナー情報、  
その他各種ご案内などを不定期にてお届けいたします。

本メールの転送はご自由です。まわりにご関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、  
どうぞ遠慮なくご共有ください。

また配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作を  
して下さい(宛先: newsmail@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入  
していただければ自動的に削除されますので、どうぞ遠慮なく。

---

#### ◆目次

- 柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」
- EBU(European Broadcasting Union) 発
- FIMS(Framework for Interoperable Media Systems) 発
- SMPTE(Society of Motion Picture and Television Engineers) 発
- その他
- メタフロンティアからのお知らせ

---

#### ◆柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」

- 第11回 ”放送・映像メディア技術とイベント”

2月7日、ソチ五輪の開会式が開かれました。オープニングセレモニーでは大掛かりな  
プロジェクションマッピング(物体に映像を投影することで、その物体に様々な視覚的  
効果を与える技術。以下PMと呼びます)が活用され、文字通り会場全体をスクリーンに  
見立ててロシアの広大な風景や伝統的な文化芸術を壮大なスケールで描いていました[1]。

[1] <http://www.gorin.jp/highlight/20140207.html>

PM といえば、最近では一昨年の9月22~23日に東京駅を舞台に開催された「TOKYO  
STATION VISION」[2]が有名ですが、今回のPM演出で用いられたプロジェクターは何と  
132台! 技術屋としては、よくぞそれだけ大量の投影映像を切れ目なく貼り合せられた  
ものだとか妙なところに関心したりするのですが、そもそも本開会式の会場となったフィ  
シュット五輪スタジアムは何とこの開会式と閉会式のためだけに作られた、換言すれば  
あの演出を実現するためにスタジアムから作ってしまったとのことでした、「さすがは  
旧ソ連の流れを汲む強権大国ロシアだ!」と感心してしまいました(巷ではこういうのを  
畏敬(?)を込めて「ああ、おそロシア」とか言うそうで。。^^;;)。

[2] <http://www.youtube.com/watch?v=xHsbdq8GtKc>

それはさておき、今回のソチ五輪は、PM技術が大きな進展を遂げたイベントとして  
後世に伝えられるような気がしています。

ところで、よく知られるように放送・映像メディア技術の発展は、その節目々々  
において、しばしば大イベント(それは必ずしも意図されたものばかりではありませんが)  
に後押しされてきました。そこで今回は、筆者の独断と偏見でそれらの幾つかを振り  
返ってみたいと思います。

そもそも初めて蓄音機を発明したのは、かの発明王トーマス・エジソンですが、何と彼が1877年に自ら歌って録音した「メリーさんの羊」の音声が残っていました[3]。ちなみにこのサイトでは1900年のパリ万博で録音された日本人の音声、なんてのも聞けます。

[3] <http://karapaia.livedoor.biz/archives/52148816.html>

一方でテレビと言えば、「テレビの父」と呼ばれた高柳健次郎博士が1924年に世界で初めて受信、ブラウン管表示した片仮名の「イ」ですね[4]。

[4] <http://www.youtube.com/watch?v=T0-quZogLDg>

時は流れて1953年、NHKがテレビの本放送を開始しました。当時の受信契約数は866件。しかしそれから高々6年で200万台以上の白黒テレビが普及することとなりましたが、これを大きく後押ししたのが皇太子(今上天皇)ご成婚をハイライトとしたいいわゆるミッチーブームでした[5]。

[5] <http://www.youtube.com/watch?v=370I1zYfiD4>

その4年後の1963年には早くも日米間で初の衛星テレビ伝送実験が実施されました。当初予定されていたコンテンツはケネディ大統領から日本国民に当てたメッセージ。しかし実際に送られたのはケネディ大統領暗殺という衝撃のニュースでした[6]。

[6] <http://www.youtube.com/watch?v=DDmyPuCneK0>

そして翌年の1964年には、史上初の衛星生中継が東京五輪で実現しました。また、カラーテレビの普及を大きく加速したのもこの東京五輪でした[7]。

[7] [http://www.youtube.com/watch?v=Q7q-seQx\\_u8](http://www.youtube.com/watch?v=Q7q-seQx_u8)

時を経て1988年、本格的なハイビジョンの実験放送が実施されたのは、開会式の聖火台での鳩の映像で有名(?)になったソウル五輪でした[8]。

[8] <http://www.youtube.com/watch?v=kEDcPy2IEpw>

1991年、前年のイラクによるクウェート侵攻に対抗し、多国籍軍の「砂漠の嵐」作戦によるイラク空爆を、米CNNがバグダッドから実況生中継しました[9]。

[9] <http://www.youtube.com/watch?v=eFjsa0Rwh0Y>

衝撃の映像と言えば、やはり2001年9月11に発生した米国同時多発テロ事件。特にニューヨークの世界貿易センタービルへの航空機の突入については、1機目の衝突後の様子が臨時ニュースとして国際中継されていたため、2機目の突入、そしてその後のビルの崩壊といった衝撃的な映像を世界中の多くの人たちがリアルタイムで見ることになりました[10]。

[10] <http://www.youtube.com/watch?v=zElgf0BzZH8>

翌年秋にアフガニスタンで始まった米軍によるアルカイダー掃作戦では、従軍した報道カメラマンによる現場の生々しい映像が、衛星携帯電話(インマルサットM4)を通じてお茶の間に届けられました。

これはTNG(Telephone News Gartering)と呼ばれる技術[11]ですが、当時のビットレートは高々64kbpsでしたので、伝送された映像は従来の品質基準だとオンエア不可と判断されたもの。しかしそれらの映像は世間の高い関心を集め、例え映像品質が十分でなくても、その内容によってはオンエアする価値があるということを知らしめる出来事であったと思います(残念ながら当時の実際の映像は入手できず :-< )。

余談ながら、この技術を主導したのは日本テレビの川上順カメラマン。実は筆者が前職にあった2006年、日本テレビの映像取材の現場で研修をさせてもらう機会があり、この時指導していただいたのが川上氏でした。ライブドア事件の映像取材で六本木ヒルズへ同行させていただいた折、TNGの話熱く語っておられたのが強く印象に残っています(悲しいことに、同氏は2010年7月31日に、取材先の埼玉県秩父市の山中で遭難に遭遇し、そのまま帰らぬ人となってしまいました[12]。ご冥福を心よりお祈りいたします)。

[11] <http://iss.ndl.go.jp/books/R000000004-16655537-00?ar=4e1f>

[12] <http://www.asahi.com/special/playback/TKY201008010083.html>

さて、日本での衝撃の映像と言え、やはり 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の津波の映像でしょう [13]。

[13] <http://www.youtube.com/watch?v=gbqGSR88bqo>

そして冒頭で紹介した 2014 年ソチ五輪でのプロジェクトマッピング。また今年はブラジルで開催予定の FIFA ワールドカップに合わせて 4K テレビの試験放送も予定されています。さらに再来年のリオ五輪での 8K 試験放送を経て、2020 年に開催される二度目の東京五輪ではそれらの本放送が実施予定です。

もちろんそれ以外にも、今はまだ見ぬ新たな放送アプリの出現にも大いに期待したいところです。

このように歴史上の大イベントが大きな後押しをしてきた放送・映像メディア技術。しかし同時に驚くべきは、こういった貴重な映像資産が簡単に検索でき、いつでも容易に手元で視聴できるようになってしまった IT/マルチメディア技術の恐るべき進展かも知れません。

#### ◆EBU(European Broadcasting Union) 発

- EBU Tech 3380: “EBU-TT-D Subtitling Distribution Format”が発行されました。また、EBU Tech 3381: “Carriage of EBU-TT-D ISO BMFF”の最終稿が開示され、コメントを募集中です (BMFF: Base Media File Format (ISO/IEC 14496-12))。  
[https://tech.ebu.ch/news/ebu-puts-subtitles-on-line-30jan14?newsletter\\_february2014](https://tech.ebu.ch/news/ebu-puts-subtitles-on-line-30jan14?newsletter_february2014) (EBU Tech 3380)  
<https://tech.ebu.ch/docs/tech/tech3380.pdf> (EBU Tech 3381 最終稿)  
<https://tech.ebu.ch/docs/tech/tech3381.pdf>
- “Where broadcast meets broadband”をテーマに 3/26(水)-27(木)の日程で Geneva で開催予定の BroadThinking 2014 が、引き続き参加者を募集中です。  
[https://tech.ebu.ch/events/broadthinking2014?newsletter\\_february2014](https://tech.ebu.ch/events/broadthinking2014?newsletter_february2014) (プログラム)  
[https://tech.ebu.ch/docs/events/broadthinking14/bt14\\_programme\\_web.pdf](https://tech.ebu.ch/docs/events/broadthinking14/bt14_programme_web.pdf)
- 3/28(金)に Geneva で開催予定のワークショップ “Integrating Broadcast Receivers in Handheld Devices 2014”の暫定プログラムが公開され、参加者募集が開始されました。  
[https://tech.ebu.ch/events/ctnworkshop14?newsletter\\_february2014](https://tech.ebu.ch/events/ctnworkshop14?newsletter_february2014) (暫定プログラム)  
[https://tech.ebu.ch/docs/events/ctnworkshop14/ctnworkshop14\\_programme\\_web.pdf](https://tech.ebu.ch/docs/events/ctnworkshop14/ctnworkshop14_programme_web.pdf)
- 本年度の “Network Technology Seminar 2014”が、6/24(火)-25(水)の日程で Geneva で開催されることとなりました。  
[https://tech.ebu.ch/events/nts2014?newsletter\\_february2014](https://tech.ebu.ch/events/nts2014?newsletter_february2014)
- 先月半ばに開催された BBC Academy のイベントにおいて、同社 TV 部門ディレクターの Danny Cohen 氏が、EBU R128 に基づいて DPP (Digital Production Partnership) が策定したラウドネス運用規定の採用を歓迎する旨、発言がありました。  
[https://tech.ebu.ch/news/bbcs-cohen-welcomes-major-paradigm-shift-27jan14?newsletter\\_february2014](https://tech.ebu.ch/news/bbcs-cohen-welcomes-major-paradigm-shift-27jan14?newsletter_february2014)

#### ◆FIMS(Framework for Interoperable Media Systems) 発

- 2/3(月)-5(水)に、FIMS の F2F ミーティングが開催されました。(議事録)  
[http://wiki.amwa.tv/ebu/index.php/FIMS\\_20140203](http://wiki.amwa.tv/ebu/index.php/FIMS_20140203)  
(Evain 氏による概要紹介)

[http://www.linkedin.com/groupAnswers?viewQuestionAndAnswers=&discussionID=5831737544525512704&gid=3770968&trk=eml-anet\\_dig-b\\_nd-pst\\_ttle-cn&fromEmail=&ut=2K3oyaKeMKEm41](http://www.linkedin.com/groupAnswers?viewQuestionAndAnswers=&discussionID=5831737544525512704&gid=3770968&trk=eml-anet_dig-b_nd-pst_ttle-cn&fromEmail=&ut=2K3oyaKeMKEm41)

なお、上記へのアクセスには LinkedIn へのアカウント登録(無料)が必要です。

◆ SMPTE (Society of Motion Picture and Television Engineers) 発

- “Technical Differences Between Professional Monitors, and How to Choose the Right One for the Job”なるタイトルのオンラインセミナーが、2/21(金) 3:00(日本時間)から開催されます。  
<https://events.r20.constantcontact.com/register/eventReg?llr=iwnzoxjab&oeidk=a07e88i04iac210abd>

- SMPTE Newswatch 2014年1月号が発行されました。

[http://campaign.r20.constantcontact.com/render?llr=iwnzoxjab&v=001Ro55SkI4QPZU37AqzVwMXFmAKDrH3RSSYu0hyrA2YF9Fyuo7zBx9LcXHxtVbbNEcqZzw60b-uG00XkumwLgUqF19FS-RJVWF40kpHqph9ryXF9fIf3dHAG5QAkK30xMsrranZ4KxkNvOfVUReG9vzUMAbMxTsu8h0D-3QbbRc80owb1eL9g0XS5y\\_wsnfubKntfIA\\_vNFfR2q9jV9jZ4B9HsmoZBTnmM2WvSNcQpkEpjPi1qqf-XACdWwNk8Ab8EBjnsn1X51eFJpj9\\_2w-zjJ83nSMYzi\\_](http://campaign.r20.constantcontact.com/render?llr=iwnzoxjab&v=001Ro55SkI4QPZU37AqzVwMXFmAKDrH3RSSYu0hyrA2YF9Fyuo7zBx9LcXHxtVbbNEcqZzw60b-uG00XkumwLgUqF19FS-RJVWF40kpHqph9ryXF9fIf3dHAG5QAkK30xMsrranZ4KxkNvOfVUReG9vzUMAbMxTsu8h0D-3QbbRc80owb1eL9g0XS5y_wsnfubKntfIA_vNFfR2q9jV9jZ4B9HsmoZBTnmM2WvSNcQpkEpjPi1qqf-XACdWwNk8Ab8EBjnsn1X51eFJpj9_2w-zjJ83nSMYzi_)

- SMPTE Monthly Newsletter 2014年1月号が発行されました。

[http://campaign.r20.constantcontact.com/render?llr=iwnzoxjab&v=001yqHNAgdI3XiY7nA6AM4YyIoobGDyI9YG0Gnpr8xIrp3m0t-RxtG-D1ZDefhMHfyfw88K7BI7da72a\\_BUpG0FXpcw5i0Re8f7oaHq-A8FofuP291\\_KCE3tmUmJ1RiweyrebdE92hAsvUbg39ud43YWYbyH4J\\_h62s6wFQJh1RvFxZOWft0BkKfde74wKfdxRY5Cb8vT1KqSwvdChYqTQehXjShUw6AKiG5s-6US5fjX6-srEPdtIOWfY3Nb1hFjDPHMCfDogYnDZxvrewnK5akPy-gSK00v](http://campaign.r20.constantcontact.com/render?llr=iwnzoxjab&v=001yqHNAgdI3XiY7nA6AM4YyIoobGDyI9YG0Gnpr8xIrp3m0t-RxtG-D1ZDefhMHfyfw88K7BI7da72a_BUpG0FXpcw5i0Re8f7oaHq-A8FofuP291_KCE3tmUmJ1RiweyrebdE92hAsvUbg39ud43YWYbyH4J_h62s6wFQJh1RvFxZOWft0BkKfde74wKfdxRY5Cb8vT1KqSwvdChYqTQehXjShUw6AKiG5s-6US5fjX6-srEPdtIOWfY3Nb1hFjDPHMCfDogYnDZxvrewnK5akPy-gSK00v)

- “Networked Media and the Joint Task Force”なるタイトルの標準化関連の無料オンラインセミナーが、3/5(金)3:00(日本時間)から開催されます。  
<http://events.r20.constantcontact.com/register/event?oeidk=a07e8vt6fmsfd837a19&llr=iwnzoxjab>

◆ その他

- IBC 2014 Innovation Awards の募集が開始されました。併せて併設される技術会議への発表論文も募集しています。いずれも締切は2/21(金)です。  
(IBC2014 Innovation Awards - Call For Entries)  
<http://www.ibc.org/page.cfm/ID=17>  
(IBC2014 - Call for Technical Papers and Posters)  
<http://www.ibc.org/page.cfm/link=46>
- 特許庁が中小・ベンチャー企業の特許料を約1/3にする施策を発表しました。  
<http://www.meti.go.jp/press/2013/01/20140114001/20140114001.html>
- 米 IBM 社が米 Aspera 社の買収を完了しました。  
<http://blog.devoncroft.com/2014/01/17/broadcast-vendor-ma-ibm-closes-aspera-acquisition/>
- Mr. MXF こと Bruce Devlin 氏 (AmberFin CTO) による無料オンラインセミナー “Bruce’s Shorts - Tip of the Week...” (日本語字幕付) が、好評配信中です。  
<http://www.amberfin.com/shorts-jp/>

◆ メタフロンティアからのお知らせ

(新着情報: <http://metafrontier.jp>)

- 柴田賀昭が SMPTE で議長を務める「UMID 応用プロジェクト」において提案された、SMPTE RP 205 (Application of Unique Material Identifiers in Production and Broadcast Environments) 改定ドラフトに対して、FCD (Final Committee Draft) 投票が開始されました。  
<https://kws.smpte.org/kws/groups/30mr/ballots/ballot?id=1631>
- 「この戦略製品・サービスを特許で守るにはどうすればいいのだろうか？」とお悩みの方はいらっしゃいませんか？また、「出願はしたもののその後の対応が不適切で拒絶査定を受けてしまった。」とか、「何とか特許は取ったものの競合に簡単に回避され、結局はカネの無駄に終わってしまった。」なんて悩みもしばしば聞かれるところです。  
モノづくりによる差異化が厳しくなる中、新たなビジネスの展開において特許

制度の戦略的な活用がますます重要になってきました。ここで戦略的な活用とは、単に思い付きのアイデアを特許出願することではなく、そのビジネスの展開においてその特許の目的や役割ををきちんと見定め、最小の費用で最大の効果を狙うということです。

すなわち、まずはその製品・サービスのどの部分が特許で保護できそうかといった検討から始め、次に、特許出願とは技術情報を公にすることであり、またその権利化までには相当の時間と費用が掛かることを踏まえ、それは本当に特許を取得すべき技術内容かどうかを様々な側面からしっかりと検討する必要があります。

そして一旦出願すると決めたならば、特許庁の厳格な審査に耐えて権利化を獲得すべく、十分な先行技術調査のもと先行技術に対する優位性を明確に訴求する必要があります。

特許出願と言えば一般的には特許事務所の仕事と考えていませんか？もちろん最終的に特許を出願する時には弁理士への依頼が必要です。しかし彼らの商売は御社に出願してもらって初めてナンボの世界、つまりそこには、必ずしも御社のビジネス、製品戦略に最適の助言ができるとは限らない構造的な問題があります。

さらに技術分野が細分化、深化する中、ひとりの人間がカバーできる範囲には自ずから限界がありますので、必ずしも御社の発明内容を本当に深く理解できる弁理士に担当してもらえとは限りませんし、ましてや御社のビジネス戦略上の選択肢のひとつとしての知財活用のあり方などは、一般的に彼らの専門領域を超えた範疇の話となります。

最近、前職において40件以上の出願をおこない、その後知財部署に異動してその3/4以上の権利化を達成した経験[1]を見込んでいただいたクライアント様から、特許出願に関するご相談を承り対応して参りました。ここでは、単に特許出願のみならず、自らの経験に基づいた国際標準化活動なども提案したビジネス戦略上の活用方法などについてもアドバイスをさせていただきました。

私どもは弁理士ではございませんが、前職にてビジネス戦略における特許制度の活用方法を様々な側面から深く調査研究した経験があります。さらに自ら発明者として多数の特許を出願し、また知財担当としてそれらの多くを権利化した実績があります。

ただ私どもの専門分野はあくまで映像技術あるいはIT/マルチメディアですからそれ以外の、例えば化学や医療関連といった分野では門外漢です。

つきましては、もし御社で特許に関するお悩みや相談事などがございましたら、是非ご支援をさせていただきたく、まずは弊社(info@metafrontier.jp)までお気軽にお声掛け下さい。

[1] これまでに柴田賀昭が出願、取得した特許の一覧です。

<http://metafrontier.jp/drupal/ja/about/members/patents>

- ファイルベースワークフローを導入したものの「こんな筈ではなかった。」とか「何とか使ってはいるものの完全なブラックボックス状態で、万一の時が不安。」などといったことでお困りのユーザー様はいらっしゃいませんか？

特にこれまで親しんできた技術トレンドとは“非連続”なITベース技術が業界に急速に広がるにつれ、ユーザー様とベンダ様との会話がうまくかみ合わず、関係を損ねてしまったといったお話もちらほらと伺っております。

ファイルベース技術は今も日々改良が進められているものの、残念ながら現時点においても、(ベンダ様を問わず)ユーザー様のあらゆる要求を完全に満足できるようなソリューションが提供可能な技術レベルには達しておりません。

従ってファイルベースワークフローの導入を本当に成功させるためには、ユーザー様、ベンダ様が互いの深い信頼関係の元、技術とコストの兼ね合いから、その時点での「ベストソリューション」を互いに切磋琢磨しながら探っていくといった姿勢こそが最も大切なことであります。

弊社ではファイルベースに関する豊富な技術知識を元に、ベンダニュートラルな立場から、ユーザー様とベンダ様が相互理解をより深めて「ベストソリューション」を見出すための“技術通訳”といったお手伝いをさせていただきたいと考えております。

つきましては、何かお困りのことがございましたら、まずは弊社(info@metafrontier.jp)までお気軽にお声掛け下さい。

- MXF (Material Exchange Format) の出張セミナー、引き続き好評提供中です。  
“MXF は初めて”という方々を対象に MXF が絡むビジネス判断をおこなう上で必要と

される MXF 技術の基本知識の習得を目的とした「基礎編」と、これから本格的に SMPTE の MXF 関連規格書を読みこなしていく方々を対象に、その前準備として必要とされる MXF 技術の全体像の把握を目的とした「応用編」をベースに、御社のニーズに応じたかたちにカスタマイズして提供させていただきます。

その他、ご要望により XML (eXtensible Markup Language) の基本や FIMS 等の技術セミナーにも柔軟に対応させていただきますので、まずは弊社 (info@metafrontier.jp) までお気軽にお問合せ下さい。

今回のご紹介は以上です。

ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

---

本メールは、弊社スタッフがこれまでに名刺交換させていただいた方や、弊社 HP からのお問い合わせの際、アドレスをご登録いただいた方などにお送りしております。

配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作をして下さい (宛先: newsmail@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入していただければ自動的に削除されますので、どうぞご遠慮なく。

また本メールを転送などで受取られた方で、今後の受信を希望される場合は、一行目に「配信希望」とご記入の上、お名前、会社名 (あるいは所属組織名) を添えて下記宛先にご連絡いただければ、次回から送信させていただきます。

また本メールに関するご意見、ご感想などがございましたら、こちらも下記宛先にお送り下さい

(宛先: request4newsmail@metafrontier.jp)。

編集/発行 : メタフロンティア合同会社 柴田賀昭  
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川 1-13-12 アーバンビル 6F  
URL: www.metafrontier.jp

Copyright (C) 2012-2014 metaFrontier.jp, LLC. All Rights Reserved

---